故 岡谷清子先生を偲んで

島 一郎（大学経済学部教授）

岡谷清子氏略歴

一九一五年三月一日生まれ
一九三四年三月　奈良女子高等師範学校卒業
一九五一年四月　同志社高等学校教諭
一九六四年三月　同志社高等学校退職
一九六四年四月　北京外国語大学客員教員（一年間）
一九九五年十二月二七日一九時五八分　永眠　八〇歳

私の母校・同志社高校ではそのユニークな外国語教育の一環として、ドイツ語やフランス語と並んで四十年余りも前から中国語が正課に取り入れられている。時おり後輩にあたるゼミ生から「岩倉で中国語を学びました」などと声をかけられるたびに、なつかしく偲ばれるのは、その第一期生であった私たちを心をこめて暖かく指導していただいた、いまは亡き岡谷清子先生の若き日の面影である。

私がはじめて先生に出会ったのは、高校に進学したばかりの昭和二十七年の春、国語の時間だった。西陣の古い商家にお生れの先生は、その頃よく瀟洒な着物姿で教壇に立たれたが、それが実に颯爽としていて、また美しかった。まだ高校で女の先生はごく珍しかったその頃のこと、最初のうちは騒いだり、ふざけたりして何とか授業を潰そうとしていた私たち悪童どもも、先生の、淀みなく流れる水のように流暢な授業にしだいにひきこまれて、静かに聞き入ると、先生の優しさと暖かさが授業のふしぶしから伝わってきて、そのうちすっかり魅せられてしまったのを覚えている。

そんな授業のある時間、先生が美しい本場仕込みの中国語で朗詠された白居易の「長恨歌」の一節に惹かれた私たち何人かが、忙しい先生にむりやりに中国語の手ほどきをお願いして「同好会」を作ったのが、思えば岩倉での中国語教育のはじまりだった。週何日か放課後を割いて先生は、ご自分で整えた教材を手に熱心に丁寧に教えて下さったばかりか、私たちには何もかも目新しかった中国の人々の生活や文化をわかりやすく紹介していただき、とても楽しい授業だった。

このような実績をふまえて、先生の懸命なご努力が実を結んで、私たちが三年を迎えた春、中国語は晴れて正課となった。なにしろまだ国交さえなく、中国への関心も薄かったその頃のこと、先生のご苦労は大変だったと思うが、それに耳を傾け先見の明ある英断を下された当時の先生方もまた素晴らしかったと思う。

幸いにも私は先生との出会いによって芽生えた中国への関心を、大学に進んだ後、先生のご夫君、岡谷元治先生のご指導のもとで研究に生かす機会に恵まれ、今日に至っている。この間お二人の恩師から受けた公私にわたる数々の暖かい恩情は到底この小文では書き表すことができない。ここではただ、先生の同志社で残された足跡が、多くの教え子の心の底ばかりでなく、いまの母校にもしっかりと根付いていることを紹介して、先生の在りし日の面影を偲ぶよすがとしたい。

故 中島哲人先生を偲びて

渡辺 弘（大学経済学部教授）

中島哲人氏略歴

一九一一年七月一九日生まれ
一九三七年同志社専門学校講師　一九三八年法学部助手
一九四〇年九月同助教授　一九四七年法経学部教授　一九四八年経済学部教授　一九八二年名誉教授　一九八四年秋には勲3等瑞宝賞を受勲された。
一九九六年三月五日二時五九分永眠　八四歳

中島先生は平成八年三月五日早朝肺炎のため永眠されました。二月二十八日に入院され、三月二日早朝ご危篤の連絡を受け、早速お見舞いに参りましたが、最早やお話はできませんでした。三月四日には病状も安定の様子だったので、回復されるものと思っていただけに、五日早朝訃報に接したとき、あまりの急逝のため信じられませんでした。先生は若い頃に大病を何度かされていて、夜の外出を殆んどされず、健康には特に注意しておられたのに、という気持で一杯でした。

先生は昭和十三年四月同志社大学法学部助手になられて以来、経済原論の科目を担当され、教育と研究一筋に生きてこられた、信念の人でした。研究の中心は昭和十一年に出版されたケインズの『一般理論』の検討とその発展にありました。そのケインズの書物はアンダーラインと書込みで真黒になるほど読まれたのを知り、精読の必要を改めて教えられました。また、経済数学の研究会が、夏休みや春休みもなく、週一回開かれ、研究の厳しさを知りました。

教え子は多く、二万数千人に上り、多くの大学教員を育てられました。こうした功積が認められ、一九八三年教育功労者として勲三等瑞寶章の叙勲の栄に浴されました。

大学にこられるときは、夏でも背広とネクタイ姿、先生の端正な身嗜みは定評がありました。趣味は写真、運動は散歩ぐらいで、研究一筋の先生は、退職されてからも週三回程度、運動を兼ねて名誉教授室で研究を続けておられました。数年前歩行が少し不自由になられてからは、お嬢様が大学までの送迎をしておられました。この一年、それも難しくなられたからでしょうか、今度はご自宅の書斎を使い易いように増改築されました。先生の研究への執念を感じる思いです。

どうか安らかにお休み下さい。

同志社花の歌

―中川光久先生を偲んで―

仁井国雄（元女子中学・高等学校校長）

三月十五日女子中高から中川先生死去の連絡があった。先生の住居は近いので、すぐ弔問をしたが、ちょうど湯灌をしております。見てやって下さいとの奥様の言葉に従い、最後のお別れをした。女子教育に生涯を捧げ、苦難の闘病生活を終えられた先生は、どんなに残念だったことだろう。

先生にとって、この世には家庭と学校しかなかった。酒・煙草は別として、あとはTVのラグビー観戦程度で、奥様が近くの碁会所を勧められても余り気乗りはしなかった。とにかく女学校一本だった。それだけに女学校に対する思い入れは深かった。二月二十七日からは話もできぬ状態になられたが、奥様は毎日、朱塗りの箱入りのオルゴールを枕もとで鳴らし続けられ、座を外す時には、看護婦にオルゴールのゼンマイを巻くことを頼まれた。オルゴールの曲は「同志社花の歌」である。この歌は修養会や同窓会などで讃美歌と共に必ず歌われている。病床で毎日奏でられたそのメロディ、それは重病で話もできぬとしても、ひょっとして耳に聞こえはすまいかという奥様の必死の願いからだった。「そうしたら先生、一回だけ目尻から涙を流しました。先生きっと聞えたんです。」先生はこの歌を鎮魂歌として、あの世に旅立ってしまった。

先生の教育の特色は、できる子よりも、やんちゃで手におえぬ子を指導することだった。登校拒否の生徒を立ち直らせようと、毎晩電話をかけ続け、ロングスカートの子に「廊下を掃除してくれておきに」と、やんわり注意することもあった。静和館南運動場で遅くまでソフトボールクラブの指導に打ちこまれた姿は、今も鮮やかに想起できる。

先生が非常な照れ屋だったことは有名である。旧制富山高校の同級生、五人グループの一人、龍安寺塔頭大珠院の盛永宗興師によると「中川はものを頼みにきても、横を向いて頼む。そんな頼み方があるか」と笑われる。女子高の同窓会（学年会）でマイクの前に立つと照れに照れて、早口になり、ちょっとした「いやみ」を言うこともあった。同窓生たちは、その早口の「いやみ」の中に先生の生徒を思う暖かさのあることを知っているので、うれしそうに耳を傾ける。告別式に、交通不便にもかかわらず多くの卒業生が参列したのも充分に理解できることである。

中川先生、いつまでも女子中高を、生徒たちを見守って下さい。

中川光久氏略歴

一九二五年七月二四日生まれ。一九五四年三月同志社大学大学院修了。同年四月同志社女子中学・高等学校教諭。一九七九年一一月には永年勤務者として表彰を受けられ三七年間の永きにわたり同校の教育に尽力された。一九九六年三月一四日一八時四〇分永眠　七〇歳

故 小松幸雄先生を偲んで

笹田友三郎（大学名誉教授）

本学名誉教授小松幸雄先生は去る六月十八日早朝、肺炎のため逝去された。ほんとうにさびしくなったが、最果ての人生を先生らしくよく生きてこられた。

先生は小柄ではあったが、健康で、誇り高く、弱音をはくことはなかった。何ごともとことん納得しなければ満足されなかったし、現実感覚を保ちつつ、理想をまげることはなかった。先生はいつも自然体で、とりつくろった態度をみせたこともなかった。また、名聞名利のあだばなとも無縁であった。

その先生が絶えず口にしてこられたのは、同志社のこと、経済学部のことであった。先生のご退職後わたくしは先生にたしなめられるのを承知のうえで「詮ないことを」といいつづけてきたが、先生が最後のときまで口にされたのは、同志社のことであった。

昭和四十年代の前半、紛争前夜の騒々しいときに先生は田辺用地専門委員会の委員として、広い視野に立ち、身を挺して難局に当たられた。反対する学生を前にして苦境に立たれたこともあったが、もちまえの粘りとおそれを知らぬ率直さ、陰影のないスッキリした人柄と心意気には、誰も太刀打はできなかった。

ご退職と同時に、先生が創立百周年記念事業の事務局長の重責を担われるとき、わたくしは数人の同僚と語らって、先生にこれをお引受けにならぬよう説得につとめたことがある。「隠れて生きること」を理想の境地と考えておられた先生が、世のはしたない褒貶を甘受しなければならぬと知りつつ、同志社生活の最後に、なぜいちばんの貧乏くじをひこうとされたのか。いまもってわからない。運命を見通していたように、黙っておられたあのときの先生の表情はいまも脳裏にやきついている。

「俺がやらねば」という自負と気概が、先生を決断させたのであろうか。妄執のようなものが、先生をかり立てたのであろうか。人間好きで、人間を信じ、ご自分のいいところも、そうでないところも、さらけ出してしまう先生の人柄がそうさせたのであろうか。無私という先生の徳が、徳たりえない環境であったのに……。損な性分であったといいたいが、先生はそれを肯定されないであろう。ひとつの生き方にはちがいなかった。

亡くなられた朝の先生のお顔は、「ひと休みしてまた旅に出るよ。いずれ君とは近くにいて会えるんだから」とおっしゃっているようだった。

先生の旅が平安でありますように、いまはひたすら祈りたい。

小松幸雄氏略歴

一九〇三年一〇月一五日生まれ。一九五一年同志社大学経済学部教授。一九七四年名誉教授。在職中は一九五七年、一九六二年、一九六八年の三期にわたり経済学部長を務められたほか、一九六七年同志社評議員、一九七三年創立百周年記念事業事務局長などに尽力された。
一九九六年六月一八日五時二九分永眠　九二歳